

美濃の一石五輪塔

小野木 学

はじめに

一石五輪塔は、中世後期以降に畿内を中心とする広い範囲で多用された石塔である。岐阜県では美濃地方（以下、「美濃」と記す。）の南西部を中心とする範囲に分布しており、筆者らはかつてそれらを実測し、中世葬送墓制研究会で概要を発表した（小野木他 2017）。その発表資料では、一石五輪塔の分布と紀年銘の年代順に配置した実測図を提示したが、一石五輪塔が所在する寺院等の史的背景や近世初頭の一石五輪塔について言及できなかったこと、実測図の縮尺が小さく石塔の詳細が分かりにくいことなどが課題として残った。そこで、小稿では研究会後に筆者が実見・実測した一石五輪塔を加え、美濃における中世から近世前半（17世紀代）までの一石五輪塔の分布とこれまで実測した一石五輪塔の詳細を記載し、属性分類に基づく編年を提示する。

1 分布と石材

美濃における中世から近世前半の一石五輪塔は、主に美濃南西部とその周縁に分布する（図1）。美濃南西部を中心とする地形は、主に羽島市や大垣市などが位置する自然堤防地帯と、海津市が位置する三角州地帯があり、その周縁には垂井町や大野町、本巣市、岐阜市などが位置する扇状地帯と、各務原市が位置する各務原台地、関市が位置する関盆地などがある。さらに、それらを囲むように、南西部に養老・鈴鹿山地、北西部に美濃山地、関盆地の北側に美濃高地が広がる（国土庁土地局 1975）。このうち、一石五輪塔の分布は、自然堤防地帯と扇状地帯に多く、その周辺の山地・高地帯等に散在する。特に一石五輪塔が狭い範囲にまとまって分布する地域は、養老町、垂井町、池田町、揖斐川町、大野町、本巣市、岐阜市などの扇状地帯であり、自然堤防地帯と三角州地帯を囲むように分

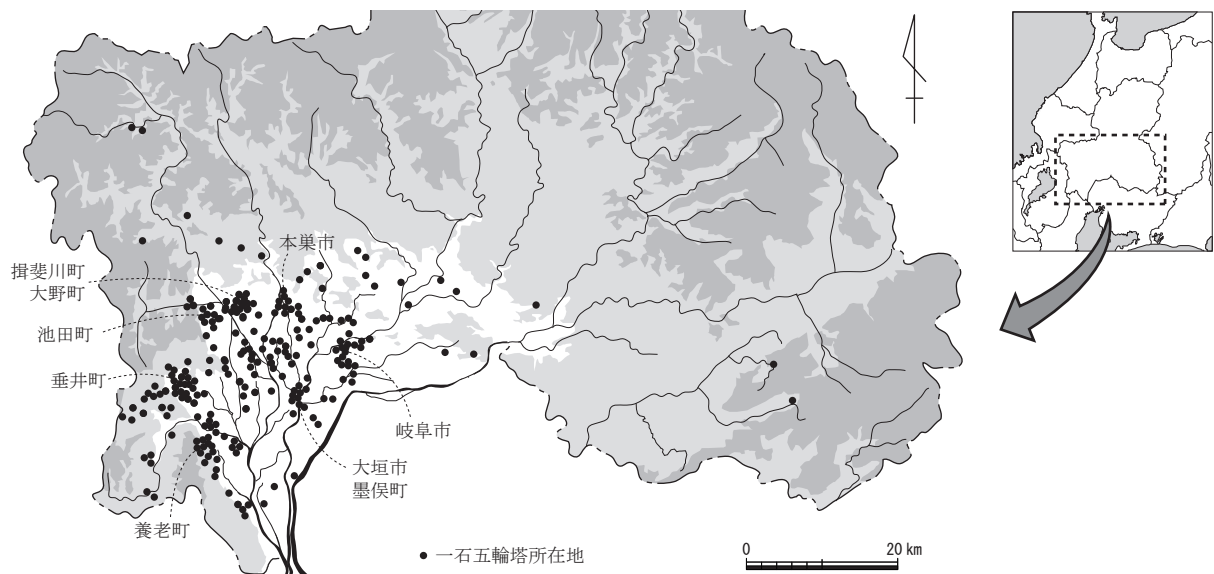


図1 一石五輪塔分布図（平成30年10月現在）

布している。また、自然堤防地帯でも大垣市墨俣町では分布が密である¹⁾。

一石五輪塔の石材は砂岩と花崗岩が多用され、その他にいわゆる笏谷石と呼ばれる福井県産の凝灰岩や石材が特定できないものがある²⁾。このうち、砂岩製の一石五輪塔が最も多い。

美濃の砂岩は、濃尾平野周縁部の山地・高地帯と、福井県や飛騨地方の境界付近の表層に確認されている（国土庁土地局 1975）。その多くは強堅な岩石で碎石原材として最適であり、一般に塊状無層理で、中～細粒で泥質岩のパッチを含むものが多いとされる。岩片・岩体のかたさは、いずれも6段階中5段階の「かたい（e5）」で硬砂岩に分類される（岐阜県企画部土地対策課 1986）。一方、東濃地域に広く分布する凝灰質砂岩の岩片・岩体のかたさは、「ややかたい（d3～d4）」である（図2上）。砂岩製一石五輪塔は、主に平野部周縁の表層砂岩帯の内側に分布しており、岐阜市より東側の分布は希薄である。また、一石五輪塔の使用石材の大半は硬砂岩であり、凝灰質砂岩は少ない。

一方、美濃の花崗岩は、主に東濃地域の恵那市や中津川市、西濃地域の揖斐郡揖斐川町貝月山周辺

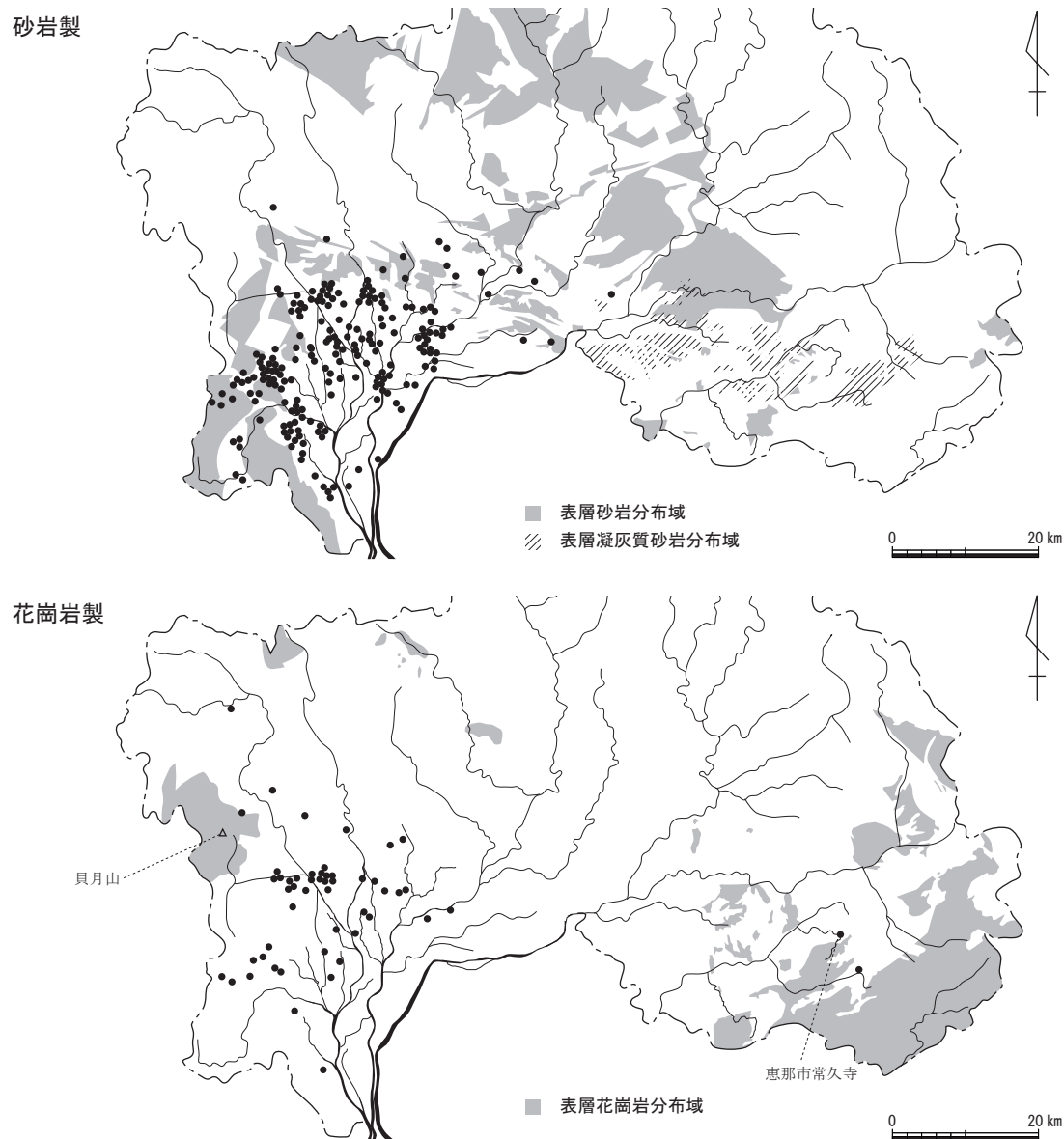


図2 石材別一石五輪塔分布図（平成30年10月現在）

などの表層に確認されている（図2下）（国土庁土地局1975）。このうち、最も広く確認されているのは東濃地域であるが、この地域における近世前半までの一石五輪塔の造立数は少ない。しかも、東濃地域の恵那市常久寺の一石五輪塔は「西三河型式の岡崎産花崗岩製品に含まれる可能性が高い」とされており、西三河型式の宝篋印塔とともに搬入したと考えられている（松井・溝口2010）。一方、その他の花崗岩製一石五輪塔は、揖斐川町貝月山付近を流れる河川の下流域にあたる揖斐川町から大野町にかけて高い密度で分布している。貝月山周辺の花崗岩の岩片・岩体のかたさは、いずれも6段階中6段階の「はなはだかたい（f6）」であるが、風化が進んだところは「マサ」化し（岐阜県企画部土地対策課1995）、現存している石塔の多くも粒状化している。

その他の石材として、福井県産の凝灰岩（笏谷石）がある。美濃では、これまで山県市南泉寺、関ヶ原町松尾山麓廃寺、同町自鏡寺の3箇所を確認しているが、今後、西濃地域を中心に確認数が増加する可能性がある。なお、これらはいずれも近世の一石五輪塔であり、南泉寺の一石五輪塔の銘文には「寛永三年」（1626年）の年号が刻まれている。

2 砂岩製一石五輪塔

次に、美濃で最も多く確認できる砂岩製一石五輪塔の詳細について記載する。掲載した実測図は紀年銘を有する資料を選択して現地で作成し、台座が確認できた場合はそれも図化した。なお、表1には実測図を掲載した一石五輪塔と台座の大きさや銘文等を示し、銘文の記載は、『日本石造物辞典』（日本石造物辞典編集委員会2012）を参考とした³⁾。

(1) 形式分類

一石五輪塔は、原則として長期間にわたり立った状態を維持することを前提として製作されるため、その機能を考える上で地輪の据え方が重要となる。そのため、既存の研究（元興寺文化財研究所1982、北野隆亮2017など）を参考とし、地輪の構造の違いによって、埋込式、安置式、柄式の3形式に分類した（図3）。

また、その基準を以下のとおりとした。

- ・埋込式：地輪側面下方に粗作り⁴⁾の加工痕が残り、底面に凹凸がみられ、原則として自立しないもの。
- ・安置式：地輪側面下方が平滑に成形され、底面が平坦であり（若しくはわずかに窪んでおり）、原則として自立するもの。
- ・柄式：有柄であり、柄穴のある台座と組み合わせるもの。

美濃におけるこれらの出現時期は、およそ埋込式が15世紀中葉から後葉、安置式が15世紀後葉、柄式が16世紀前葉以降であり、16世紀末までは埋込式と柄式が多く、17世紀以降は安置式が多い。

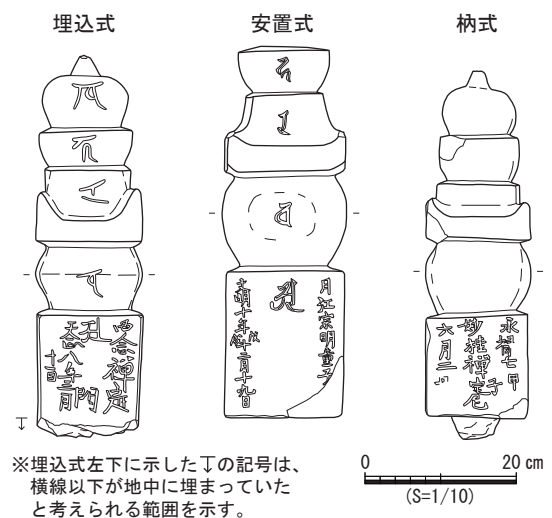


図3 一石五輪塔分類図

(2) 一石五輪塔の詳細

祖宝寺跡（不破郡関ヶ原町今須）

祖宝寺跡は真言宗の寺院であり、永正9（1512）年には複数の坊舎が存在していたとされ、明治時代以降に廃寺となった（関ヶ原町 1992）。当地には祖父谷の東岸に石積みを伴う複数の平坦面が認められ、西岸の山麓に宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられている。そのうち、一石五輪塔5基を図示した（図4・5）。

1～5は、いずれも17世紀代の一石五輪塔で、安置式である。1は高さ90.6cmの大型塔であり、地輪高は36.9cmで全体の3分の1以上を測る。水輪は側辺が直線的で、上下のくびれは深い。また、その横断面形は方形を呈する。火輪の軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がり、軒端は垂直で、地輪と水輪の側辺と同一ライン上に位置する。火輪の屋根は低く、隅棟上端は風輪下方まで延びている。風輪は扁平で、その側辺はわずかに内傾している。空輪は肥大化しており、下方のくびれが深く、最大径は中央付近に位置する。2は水輪の中央部が突出し、その横断面形は隅丸方形を呈する。火輪は軒口が厚く、軒上辺は中央から両端に向かって強く反り上がる。また、火輪上面は隅丸

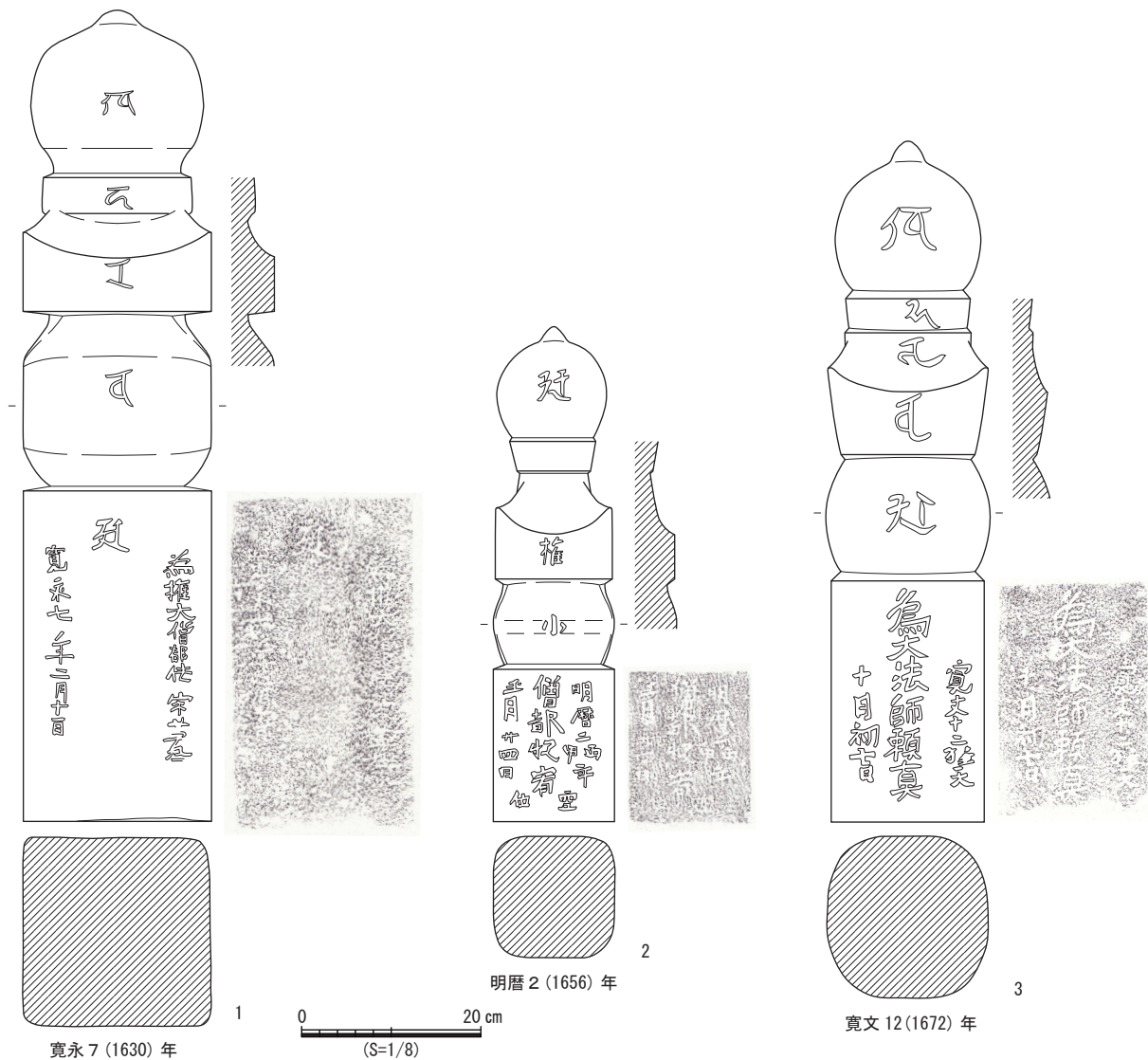


図4 祖宝寺跡石塔実測図（1）

方形を呈し、隅棟の稜線が火輪の上端まで延びていない。風輪は扁平で、その側辺は外傾しており、火輪上辺幅よりも風輪下辺径が大きい。空輪の最大径は中央付近に位置する。3は水輪が球形を呈し、その横断面形は1・2よりも丸みがある。火輪は軒口が厚く、軒上辺中央から両端に向かって強く反り上がり、軒端は外傾する。風輪は扁平で、その側辺はわずかに外傾しており、火輪上辺幅よりも風輪下辺径が小さい。空輪は肥大化し、最大径は中央よりやや下に位置する。4は高さ92.0 cmの大型塔であり、地輪の正面観は正方形で、高さと同幅である。水輪は上下のくびれが浅い樽形を呈し、火輪の軒上辺は中央が直線的で両端に向かって反り上がり、軒端は垂直である。空風輪は歪んでおり左側に傾いている。5は今回図示した一石五輪塔の中では、銘文の年代が最も新しい。水輪と空風輪のくびれが浅く、水輪の横断面形と風輪下端は隅丸方形を呈する。

銘文は、2～5は地輪正面右側に年号、左側に月日、中央に法名を刻むが、1のみは右側に法名、左側に年月日を刻む。また、2のみ火輪軒口に「権」、水輪中央に「小」を刻み、地輪の「僧都」と続く。

梵字はいずれも1面のみに刻み、1・4は各輪正面に発心門の梵字（下からア・バ・ラ・カ・キャ）

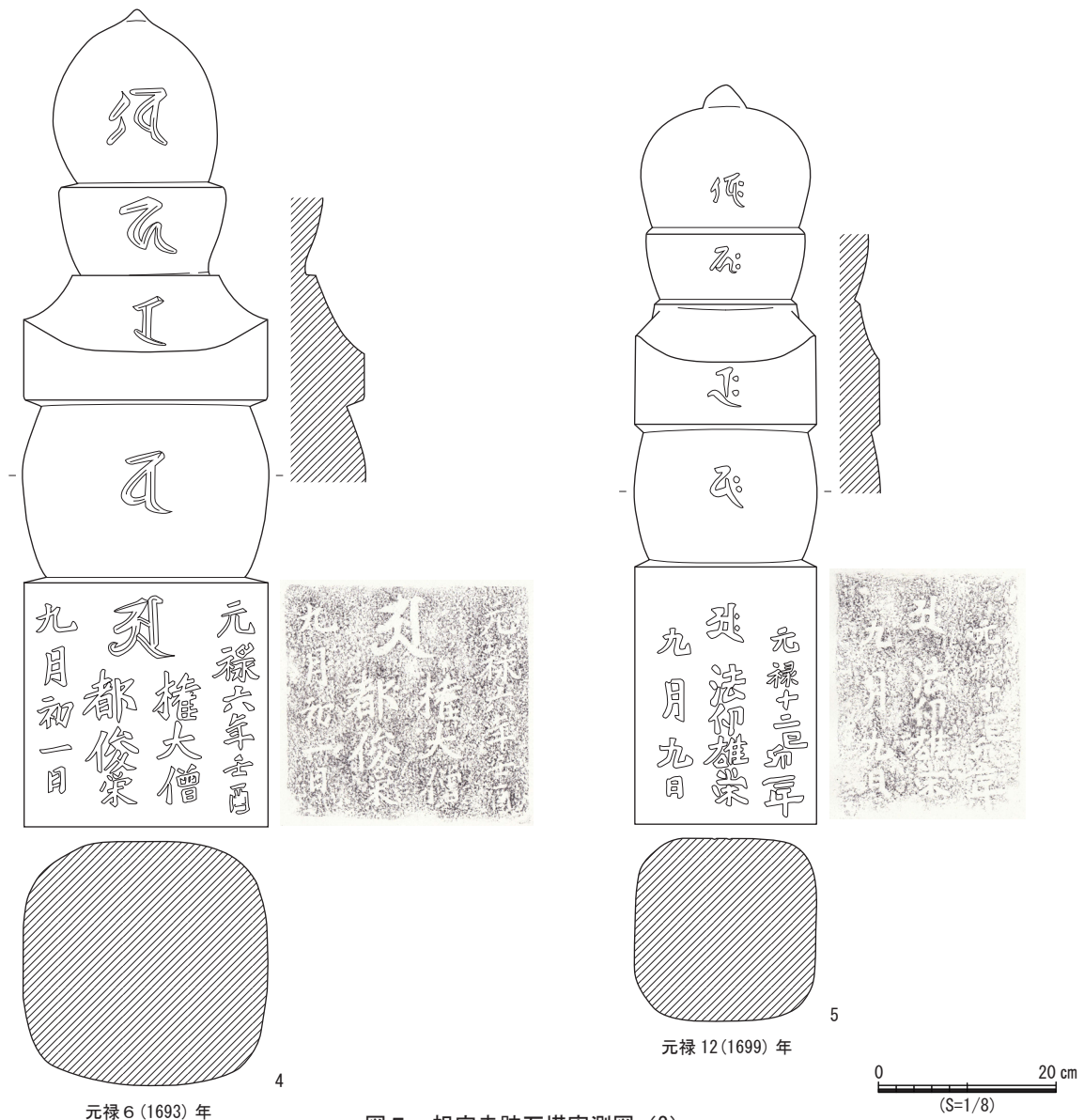


図5 祖宝寺跡石塔実測図(2)

を、5は同様に涅槃門の梵字（下からアク・バク・ラク・カク・キヤク）をそれぞれ陰刻する。一方、2は空輪のみに発心門の梵字アを刻み、3は水輪・火輪軒口・火輪屋根・風輪・空輪のそれぞれに発心門の梵字を刻む。

松尾山麓廃寺（不破郡関ヶ原町松尾）

貞享3（1686）年に笠松奉行所へ提出された松尾山絵図面には、密蔵院と自性院と考えられる二ヶ寺が松尾山麓に描かれている（関ヶ原町 1992）。いずれも真言宗の寺院で近世以降に廃寺となっており、各寺院の場所が定かでないため、小稿では仮に「松尾山麓廃寺」と呼称する。当地には石積みを伴う複数の平坦面が認められ、組合せ式五輪塔や一石五輪塔などの石塔が散在しており、そのうち一石五輪塔1基と台座1基を図示した（図6）。

6は柄式であり、地輪は縦長である。水輪は最大径が突出する算盤玉形を呈し、その横断面形は隅丸方形である。地輪中央の銘文は「天正六〇」としたが、「〇」は「年」の異体字と考えられる。7は台座であり、下辺幅15.2cm、上辺幅17.4cmで、上面に円形の柄穴を有する。側面には剥離痕、上面には敲打痕が明瞭に残り、仕上げ段階の加工痕が観察できない。なお、6と7は近接して発見され（写真1）、付近に他の一石五輪塔がないことや、柄と柄穴の連結、台座と一石五輪塔の大きさに違和感がないことなどから、6と7は一具であった可能性が高い。しかし、台座は下面よりも上面が広いため安定性を欠き、側面に剥離痕が残ることなどから、この台座はもともと地中に埋められて使用することを前提として製作され、機能時には一石五輪塔のみが地上に見えていた可能性がある。

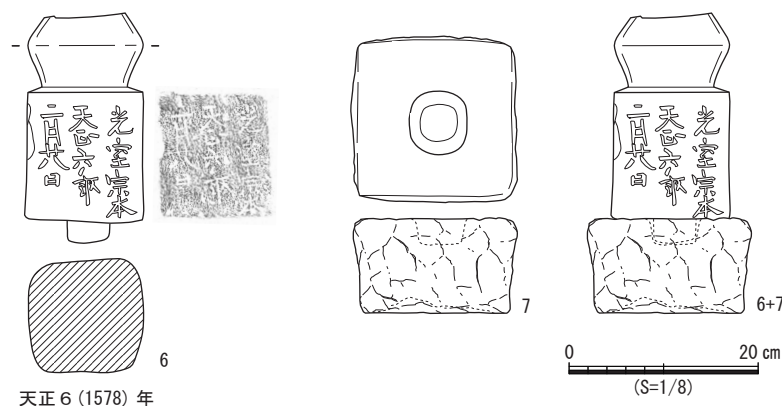


図6 松尾山麓廃寺石塔実測図



写真1 石塔発見状況

宝聚院（大垣市上石津町牧田）

宝聚院は平治元（1159）年の創建で、近江国に所在した永源寺の僧悦岩が文安元（1444）年に開基したとされている。当初は真言宗であったが、後に臨済宗に改宗した（上石津町教育委員会 2004）。寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられており、そのうち一石五輪塔14基を図示した（図7・8）。

8の銘文には「文安五年」（1448年）とあり、これまで知られている美濃の一石五輪塔では最も古い紀年銘を有する。埋込式であり、水輪は最大幅が中央付近にある球形を呈し、その横断面形も円形に近い。火輪は軒上辺中央付近から両端に向かって緩やかに反り上がり、軒下辺も両端でわずかに反り上がる。空風輪はいずれも下方のくびれが深く、空輪は宝珠形を呈する。9は水輪が球形を呈し、その横断面形は隅丸方形である。火輪の軒上辺中央は直線部分が長く、両端の反り上がりも直線的で、

軒下辺端の反り上がりは見られない。10は地輪底面に自然面が残り、火輪は軒上辺端の反り上がりが顕著である。また、風輪側辺が直線的であり、空輪は扁平である。11は水輪の最大径が中央よりも上に位置し、火輪の屋根中央には稜が認められる。12は今回実測した宝聚院の一石五輪塔の中では地輪幅が最も広く、銘文も4行にわたって刻まれ、重量感のある石塔である。地輪底面の形状は丸く、剥離痕が未調整のまま明瞭に残り、埋込式のなかでも地中に深く埋め込む形態である。13は柄式であり、ほぼ完存する。風輪高が高く側辺は直線的で、空輪の最大径は中央よりやや下に位置する。14～16は水輪の中央部が突出する算盤玉型を呈し、火輪は軒上辺端の反り上がりが顕著である。また、

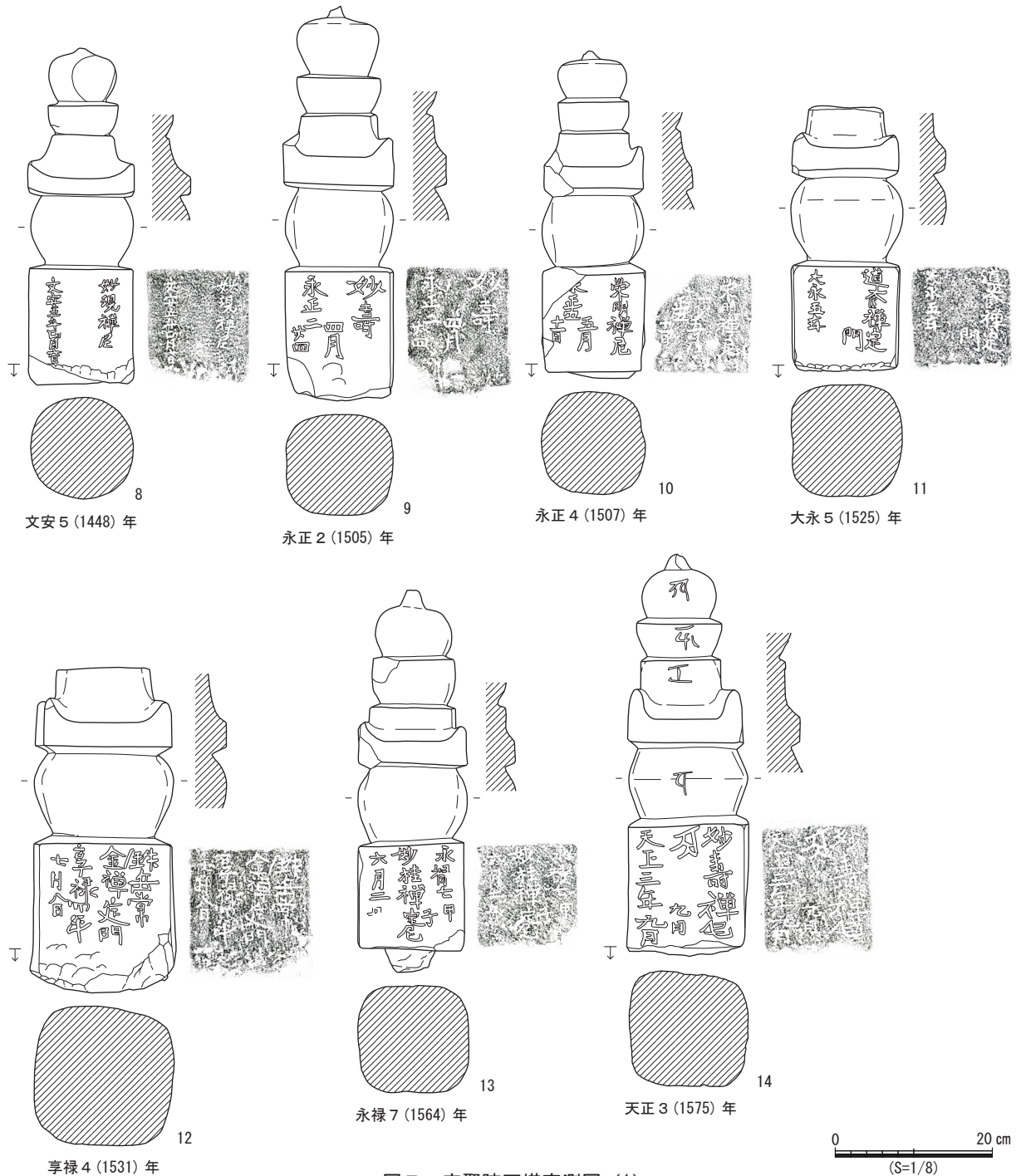


図7 宝聚院石塔実測図 (1)

空輪径よりも風輪径が明らかに大きい。14と16は各輪正面に発心門の梵字を陰刻する。17・18は小型品であり、17は銘文に「童子」とある。17は火輪の軒口が厚く、両端の反り上がりが低い。19・20は柄式であり、いずれも各輪正面に発心門の梵字を陰刻する。19は銘文のうち年月の記載が小さく、20は銘文が地輪正面に書ききれず、左側面にまで及んでいる。また、火輪の軒上辺端の反り上がりは19が三角形状で、20が細長く直角に近い角度である。21は宝聚院の過去帳に記載のある僧侶の石塔であり、各輪正面に法名が分けて記載されている。地輪は縦長で、水輪のくびれが浅く、火輪の屋根は屈折している。また、風輪は扁平で、空輪は宝珠形を呈する。

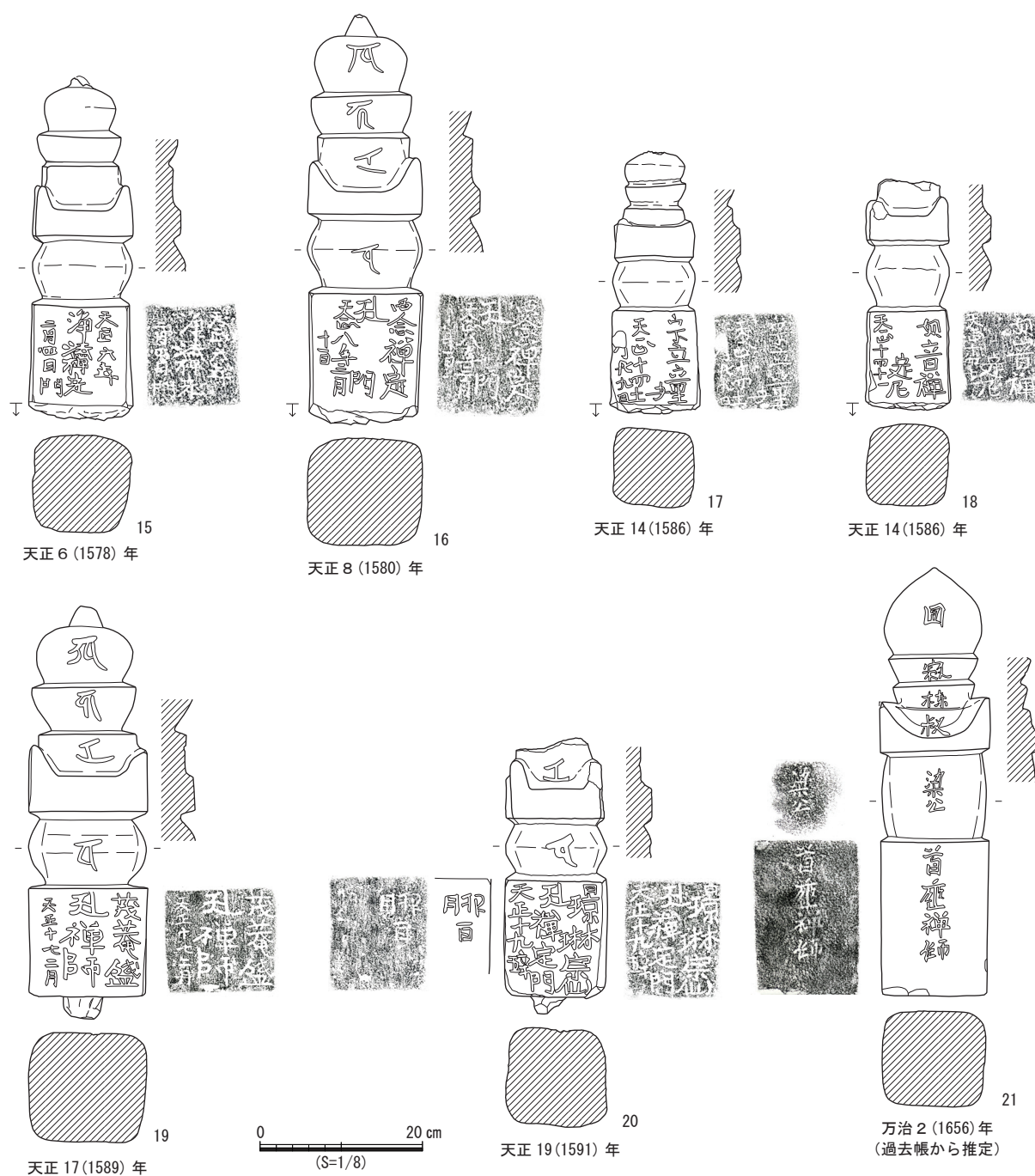


図 8 宝聚院石塔実測図 (2)

天喜寺（大垣市上石津町一之瀬）

天喜寺は天喜5（1057）年の創建とされ、近江国に所在した寂室円広禅師の法を嗣いだ雙桂定巖和尚が貞治5（1366）年に開山したとされている。当初は天台宗であったが、後に臨済宗に改宗した（上石津町教育委員会 2004）。寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔や石仏が並べられており、そのうち一石五輪塔1基を図示した（図9）。

22の銘文には「文明三」（1471年）とあり、天喜寺の一石五輪塔の中では銘文の年代が最も古い。地輪は縦長であるが、下方の約3分の1を地中に深く埋め込むため、機能時には横長に見えていたと考えられる。水輪は球形を呈し、その横断面形は円形に近い。火輪は軒上辺中央が直線的で、両端に向かって緩やかに反り上がり、軒下辺も両端でわずかに反り上がる。また、隅棟は緩やかに湾曲する。

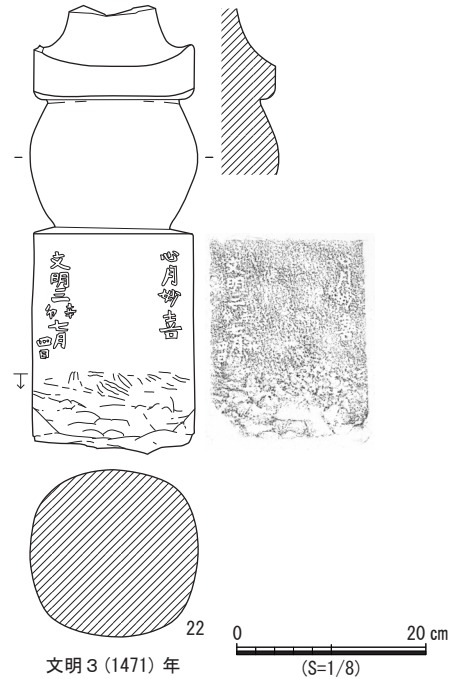


図9 天喜寺石塔実測図

大通寺（養老郡養老町宇田）

大通寺は臨済宗妙心寺派の寺院であり、土岐悪五郎康貞の菩提寺で、同人を開基とする。応永年間（1394～1428）の創建であり、関ヶ原の戦いにて堂や記録類が焼失したとされている（養老町 1978）。当地には宇田城があったとされ、寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられており、そのうち一石五輪塔2基、台座1基を図示した（図10）。

23は地輪幅が広く、重量感のある石塔である。地輪底面の形状は尖り気味で、剥離痕が未調整のまま明瞭に残る。24は地輪正面下方に線彫りの格狭間を有する。水輪の最大径は中央からやや上に

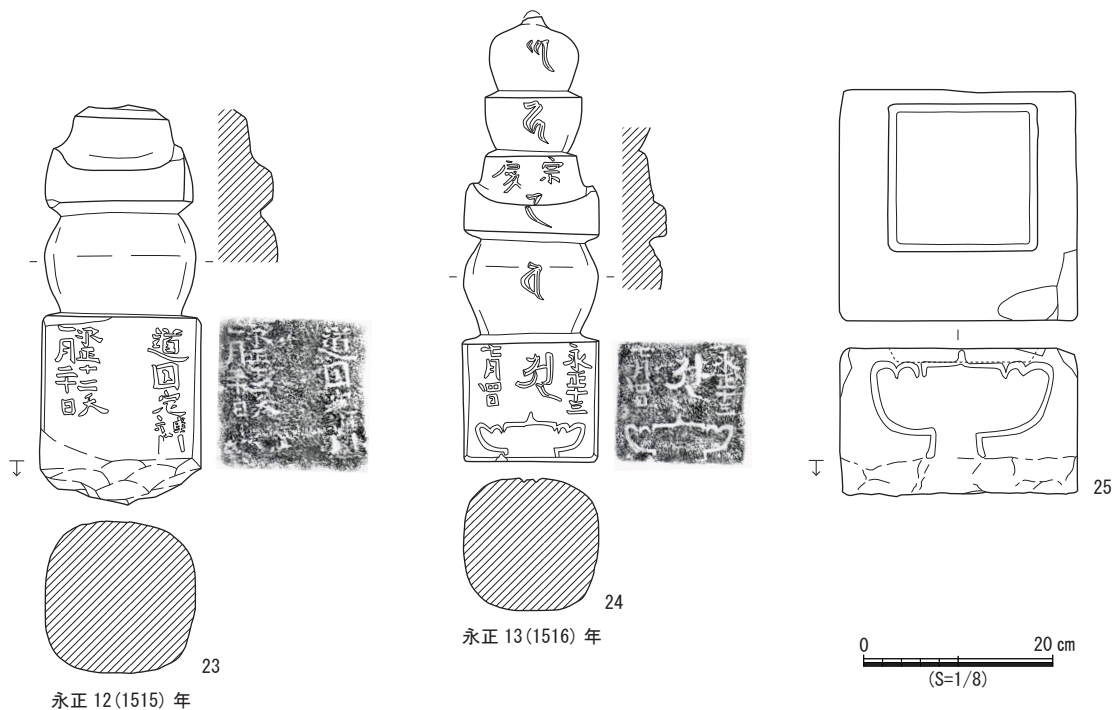


図10 大通寺石塔実測図

位置し、火輪の軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がり、空風輪のくびれは深い。また、火輪屋根に「宗慶」、地輪右側に年、左側に月日を刻み、各輪正面に発心門の梵字を陰刻するが、火輪の梵字は屋根から軒口にかけて刻まれている。なお、24の地輪底面にはコンクリートが貼り付けられており、地輪底面が浅く窪んでいることは観察できるが、安置式か柵式かの識別はできなかった。25は一石五輪塔の地輪下端を落とし込む形態の台座と考えられ、上面には一辺約15.7 cm、深さ約1.5 cmの方形の割り込みがある。また、割り込みの前面（格狭間のある面側）には幅7.2 cm、背面には幅1.5 cmの輪郭があり、前面の空間が広い。台座正面には格狭間が大きく線彫りされ、格狭間の脚から下側は剥離痕が未調整であることから、その部分は地中に埋められていたか、基壇が伴っていたと考えられる。



写真2 大通寺台座(25)

西光寺跡（養老郡養老町直江）

西光寺は養老町直江字経堂という地にあったが、洪水のために同字村下に移転したとされている。当初は天台宗であり、応永17(1410)年に時宗に改宗した(養老町1978)。移転前の土地は、「直江志津日本刀鍛錬所跡」として町史跡に指定されており、大型の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が集積し、宝篋印塔の部材には阿号の銘文を有する近江式の基礎もある。このうち、一石五輪塔2基を図示した(図11)。

26は柵式であるが、柵が欠落している。地輪は横長であり、水輪の最大径は中央より上に位置する。地輪正面の摩滅が進行しており、銘文の釈読は困難であった。27は安置式の大型塔であり、法名に阿号がある。水輪は球形を呈するが、その横断面形は隅丸方形に近い。火輪は軒口が厚く、軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がる。また、部分的に火輪上辺と空輪下辺の識別が漸移的であり、火輪上辺幅よりも風輪下辺径の方が大きい。風輪側辺は直線的で内傾しており、空輪の頂部は右側に傾いている。なお、27は各輪ともに扁平化しており、幅に対して奥行が短い。

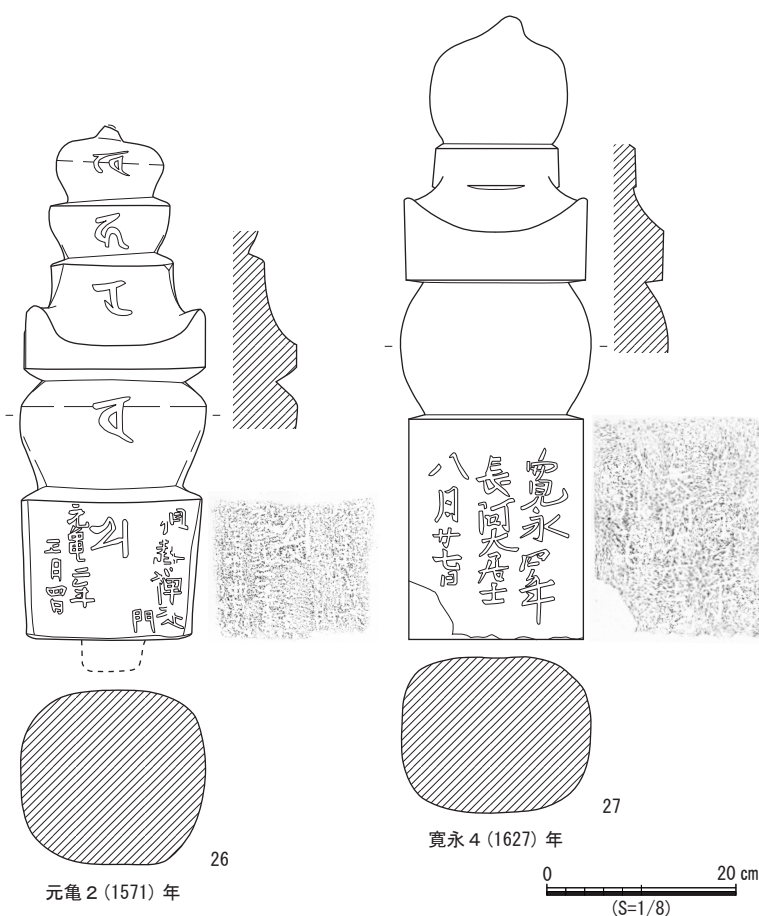


図11 西光寺跡石塔実測図

浄誓寺（養老郡養老町石畑）

浄誓寺は、当初は天台宗で誓願寺と称していたが、明應4（1495）年に浄土真宗に改宗し浄誓寺と称した。創建年代は不明で、織田信長の兵火により焼失したとの説もある（養老町 1978）。境内にある地蔵堂及びその前面には、複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔、無縫塔などの石塔やその未成品、石仏が並べられており、そのうち一石五輪塔 11 基、一石五輪塔未成品 2 基、台座 4 基を図示した（図 12～14）。

28～31 は埋込式、32 は柄式で、いずれも空風輪を欠く。28 は浄誓寺の一石五輪塔の中では銘文の年代が最も古く、「妙幸」の下に「廿六日」が刻まれており、他の一石五輪塔と異なる文字の配置である。29 は地輪下方に敲打痕が明瞭に残り、底面が突出している。30 は地輪が縦長であり、梵字

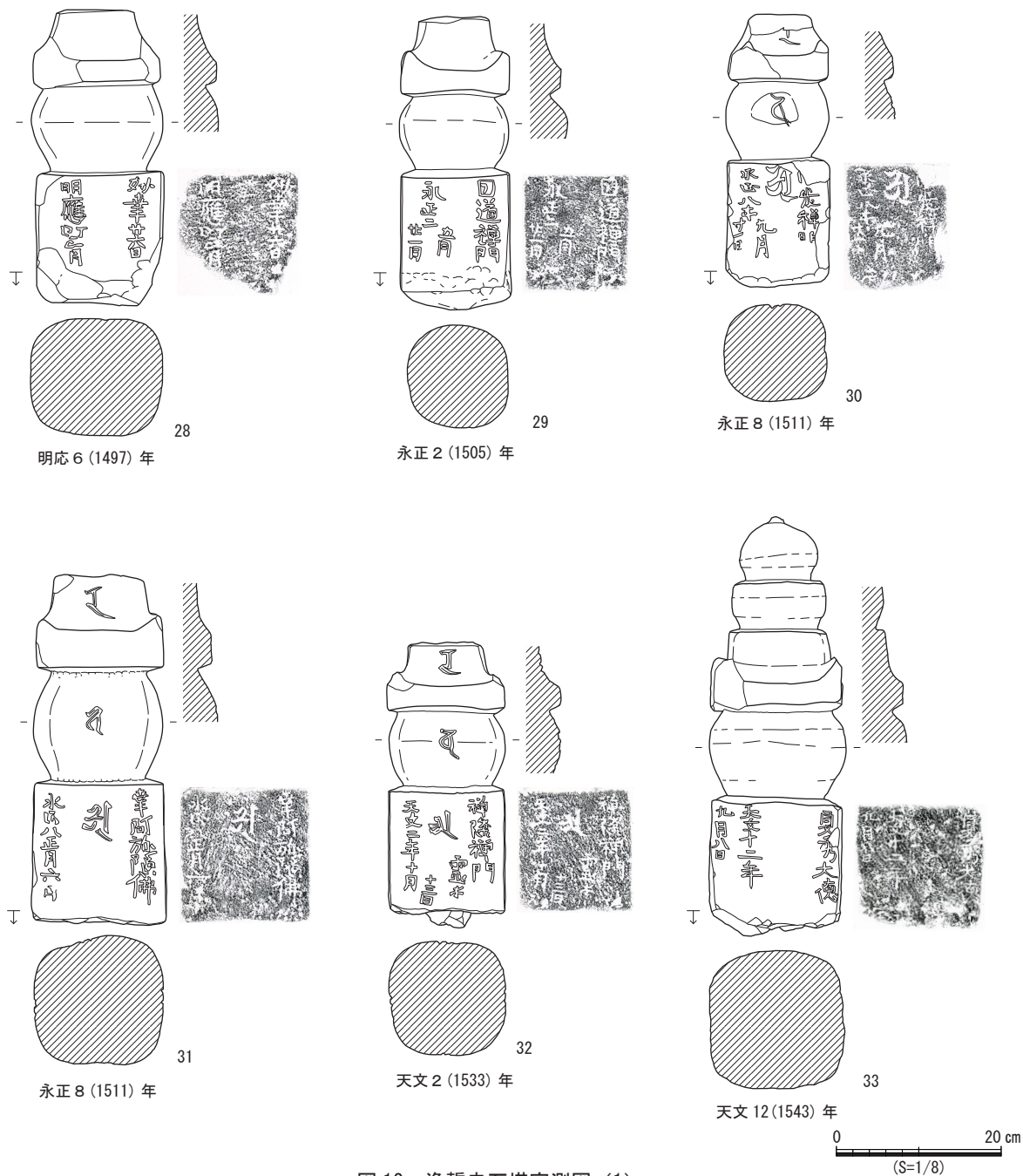


図 12 浄誓寺石塔実測図（1）

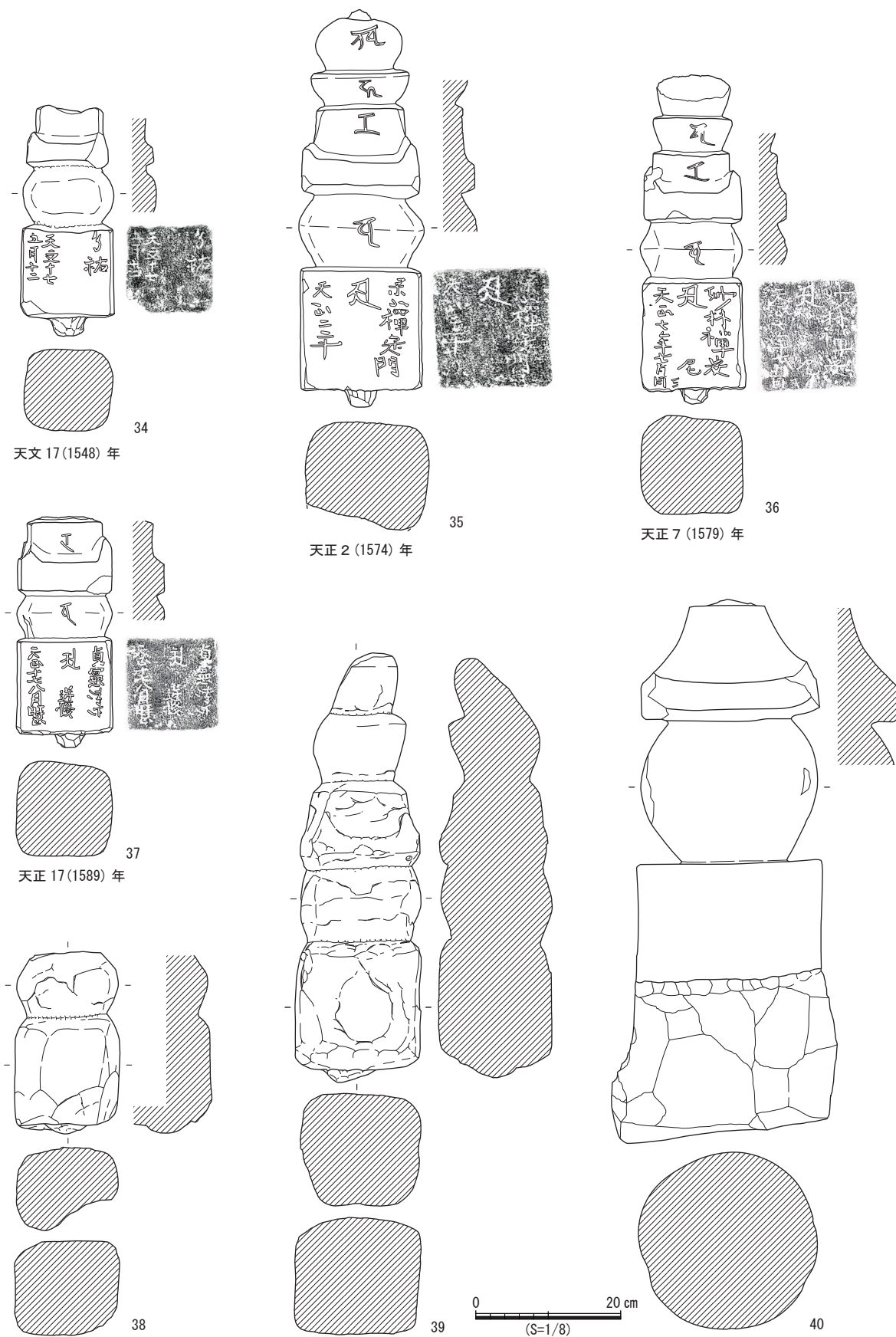


图 13 净誓寺石塔实测图 (2)

が大きく彫りが深い。31は銘文に「阿弥陀仏」とあり、水輪の上下端部にはノミによる敲打痕が明瞭に残る。32は水輪高が低く、梵字の彫りが深い。33は埋込式で、火輪の一部を欠く以外は完存している。地輪は地表面上において高さと同幅がほぼ同じであり、水輪は最大径が中央よりやや上に位置する。火輪は屋根中央付近で稜が認められ、風輪幅は空輪幅よりも広い。34～37は柄式である。34は小型品であり、水輪の横断面形が隅丸方形で、地輪の正面右側には「了祐」という法名のみが刻まれている。35は地輪の背面が欠けているものの、それ以外の遺存状態は良い。水輪は中央が突出する算盤玉形を呈し、火輪は屋根から軒口までの間に明瞭な稜を有する。空風輪はいずれも扁平で、風輪幅は空輪幅よりも広い。36は風輪上半が欠落している。水輪は中央が突出する算盤玉形を呈し、火輪の軒口は両端の反り上がりが顕著で、風輪側辺は直線的である。37は逆修塔で、小型品である。水輪が扁平で、火輪の軒口の両端は直角に近い角度で反り上がっている。30・35～37は各輪の正面に発心門の梵字を陰刻し、31・32は各輪の四面に発心門、修行門、菩提門、涅槃門の梵字を陰刻する。38・39は柄式の一石五輪塔の未成品である。いずれも柄上端の径が広く、仕上げ段階まで至っていない。また、28～37の製品と比較すると、石塔表面の剥落が進行しているような印象を受ける。38は火輪から上が折れており、39は空風輪の一部が欠けている。39は地輪の一面が未調整で丸みを帯びており、水輪上下端のくびれが浅いことから、粗作りの段階で廃棄されたと考えられる。40は一石で造られた大型の五輪塔である。地輪は扁平で、水輪はやや歪んでいるもののほぼ球形を呈し、そ

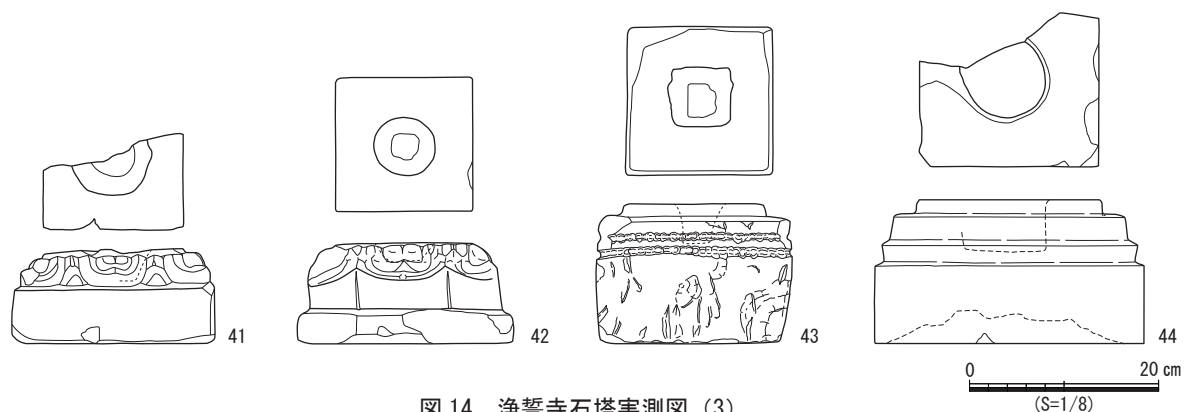


図 14 浄誓寺石塔実測図 (3)



写真 3 浄誓寺石塔

の横断面形は円形である。地輪下には地中に埋め込まれていた部分である長さ約 22 cm の未調整の部位があり（写真 3 中央右上）、その底面には自然面が認められ（同右下）、地輪との境にはノミによる連続した敲打痕が残る。また、他の砂岩製一石五輪塔と異なり、白色粒が目立つ石材を使用している。41～44 は台座である。41・42 は反花座であり、上段には各面中央と四隅に複弁を計八葉飾り、その間に間弁を刻出し、その上に方形座を設ける。42 は反花座の下に高さ約 3.6 cm の基壇とも言うべき扁平な部位を有する。43 は上段に敲打によって施された 2 条の線が残る、方形座の中央には方形の柄孔がある。44 は大型の台座で、柄穴も大きく深い。

明台寺（大垣市墨俣町墨俣）

明台寺は墨俣町墨俣字上宿に創建され、江戸時代になって現在の寺町に移転した。当初は真言宗であったが、後に浄土宗に改宗した（墨俣町役場 1956）。明台寺が創建された字上宿付近には、室町時代以前の主要街道である鎌倉街道の宿場町があったとされ、当地は長良川の渡河地点でもあり、交通の要衝であった。なお、明台寺の境内墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が散在しており、そのうち一石五輪塔 3 基を図示した（図 15）。

45・46 は安置式で、地輪が縦長である。水輪の横断面形は 45 が円形、46 が隅丸方形であり、46 は梵字周辺のみ平坦に成形している。火輪はいずれも軒上辺が直線的で、両端に向って緩やかに反り上がり、軒下辺も両端でわずかに反り上がる。なお、45 の地輪底面には自然面が残る。47 は柄式であり、地輪は横長で、柄径が 8.2 cm と太い。水輪は中央が突出し、火輪は軒上辺中央が直線的で両端に向って緩やかに反り上がり、屋弛みも緩やかである。空風輪は、空輪径よりも風輪径が大きい。なお、45～47 はいずれも発心門、修行門、菩提門、涅槃門の梵字を各輪の四面に陰刻しており、47 には美濃守護代斎藤利藤の養子である斎藤利為の法名が刻まれている（横山 1996）。

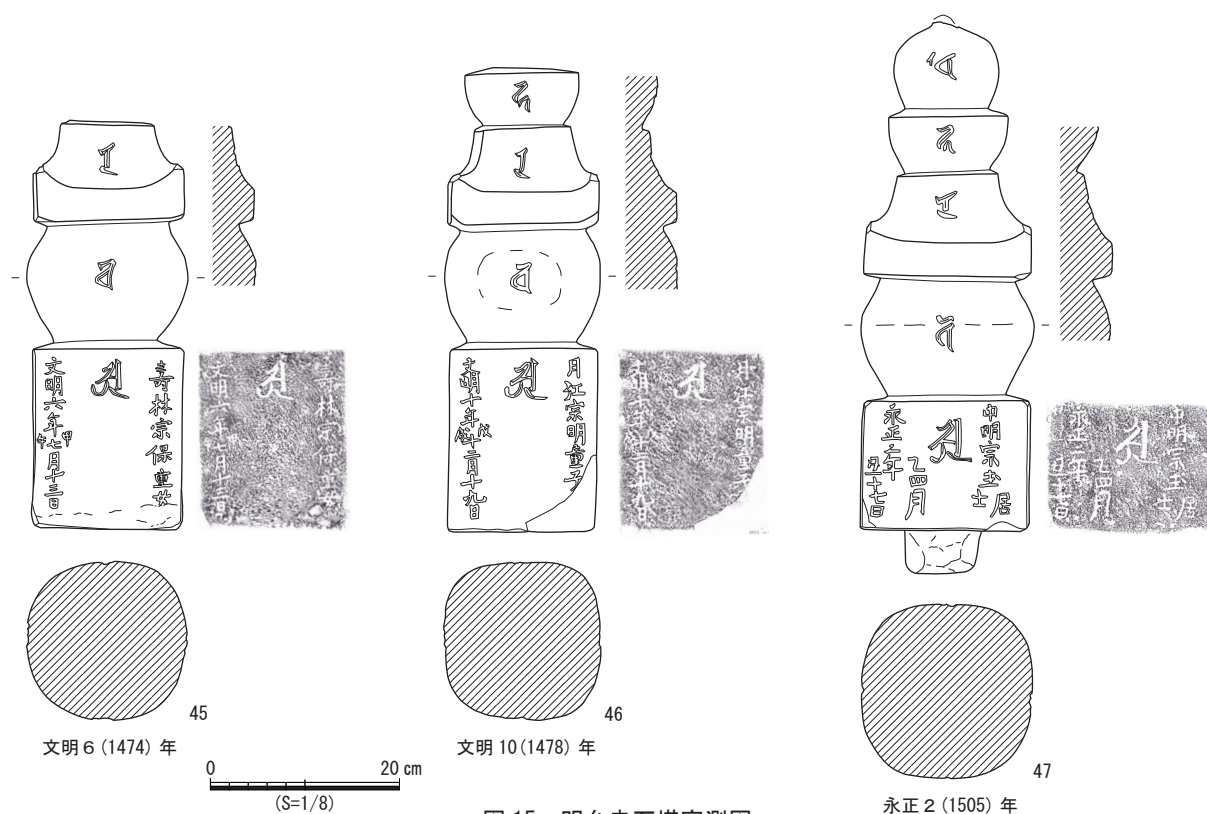


図 15 明台寺石塔実測図

表1 一石五輪塔・台座の大きさ等

No.	所在地	分類	大きさ(※)			梵字位置	銘文 西暦	銘文
			a	b	c			
1	祖宝寺跡	安置式	21.0	36.9	90.6	一面	1630	為権大僧都□□(栄カ)□□/(梵字)/寛永七年二月十一日
2	祖宝寺跡	安置式	13.6	17.0	55.0	空輪にア	1656	明暦二丙年/権少僧都□(快カ)宥□(霊カ)位/□(正カ)月廿四日
3	祖宝寺跡	安置式	17.0	27.0	76.0	一面	1672	寛文十二壬子天/為大法師頼真/十月初七日
4	祖宝寺跡	安置式	27.5	27.5	92.0	一面	1693	元禄六年壬□(西カ)/(梵字)/権大僧/都俊榮/九月初一日
5	祖宝寺跡	安置式	20.6	29.0	83.0	一面	1699	元禄十二巳卯年/(梵字)法印雄榮/九月九日
6	松尾山麓庵寺	柄式	12.5	13.8	—	—	1578	光室宗本/天正六□/二月廿八日
7	松尾山麓庵寺	台座	17.4	—	10.0	—	—	—
8	宝聚院	埋込式	13.2	12.1	40.4	—	1448	妙現禅尼/文安五年□(四カ)月六日
9	宝聚院	埋込式	13.6	11.9	45.8	—	1505	妙壽/永正二四月廿四
10	宝聚院	埋込式	12.8	11.5	39.9	—	1508	栄明禅尼/□(永カ)正五五月十一日
11	宝聚院	埋込式	13.4	12.3	—	—	1525	道□禅定門/大永五年
12	宝聚院	埋込式	16.6	13.3	—	—	1531	鉄岳常/金禅定門/享禄四年/七□(月カ)八日
13	宝聚院	柄式	13.6	13.1	45.6	—	1564	永禄七甲子/妙桂禅定尼/六月二□(日カ)
14	宝聚院	埋込式	15.0	15.4	50.1	一面	1575	妙壽禅尼/(梵字)/天正三年九月九日
15	宝聚院	埋込式	11.4	12.0	40.3	—	1578	天正六年/浄法禅定門/□(二カ)月四日
16	宝聚院	埋込式	13.0	13.5	48.1	一面	1580	西念禅定門/(梵字)/天正八年三月/十一日
17	宝聚院	埋込式	10.4	11.5	31.8	—	1586	□立童子/天正十四十一/□(月カ)廿九日
18	宝聚院	埋込式	9.6	11.3	—	—	1586	如音禅/定尼/天正十四十一
19	宝聚院	柄式	14.2	13.2	48.1	一面	1589	茂庵盛禅師/(梵字)/天正十七二月
20	宝聚院	柄式	12.0	14.3	—	一面	1591	環琳宗仙/(梵字)禅定門/天正十九辛卯/五月一日
21	宝聚院	安置式	13.2	18.9	52.7	—	1656	圓寂棟叔梁公首座禅師
22	天喜寺跡	埋込式	17.0	14.8	—	—	1471	心月妙喜/文明三辛卯七月四日
23	大通寺	埋込式	15.9	15.1	—	—	1515	道□(因カ)定門/永正十二天/一月二十日
24	大通寺	不明	13.4	12.6	46.8	一面	1516	宗慶/永正十三/(梵字)/七月四日
25	大通寺	台座	25.2	—	15.4	—	—	上面幅25.2cm、奥行24.4cm
26	西光寺跡	柄式	16.9	14.7	54.5	四面	1571	[] 禅□(定カ)門/(梵字)/元龜二年/□月四日
27	西光寺跡	安置式	18.5	23.5	66.0	—	1627	寛永四年/長阿大居士/八月二十七日
28	浄誓寺	埋込式	14.9	11.8	—	—	1497	妙幸廿六日/明應丁巳正月
29	浄誓寺	埋込式	12.9	11.6	—	—	1505	□(因カ)道禅門/永正二年五月廿一日
30	浄誓寺	埋込式	12.2	13.2	—	一面	1511	□□(長カ)禅門/(梵字)/永正八年九月十一日
31	浄誓寺	埋込式	15.9	15.2	—	四面	1511	幸阿弥陀佛/(梵字)/永正八正月六□(日カ)
32	浄誓寺	柄式	14.2	14.5	—	四面	1533	禅□(隆カ)禅門靈□/(梵字)/天文二年十月十三日
33	浄誓寺	埋込式	15.6	13.1	47.9	—	1543	□秀大徳/天文十二年/九月八日
34	浄誓寺	柄式	12.0	12.1	—	—	1548	了祐/天文十七/五月廿二
35	浄誓寺	柄式	15.9	16.5	52.5	一面	1574	宋心禅定門/(梵字)/天正二年
36	浄誓寺	柄式	13.5	14.7	—	一面	1579	妙林禅定尼/(梵字)/天正七年七月□日
37	浄誓寺	柄式	12.4	12.7	—	一面	1589	貞憲□□/(梵字)逆修/天正十七八月時正
38	浄誓寺	柄式未成品	14.3	13.0	—	—	—	—
39	浄誓寺	柄式未成品	17.4	16.1	—	—	—	—
40	浄誓寺	埋込式	25.3	15.8	—	—	—	—
41	浄誓寺	台座	21.4	14.9	10.1	—	—	—
42	浄誓寺	台座	23.0	14.5	10.7	—	—	—
43	浄誓寺	台座	20.7	14.7	14.8	—	—	—
44	浄誓寺	台座	28.5	19.0	15.2	—	—	—
45	明台寺	安置式	15.7	19.0	—	四面	1474	壽林宗保童女/(梵字)/文明六年甲午七月十三日
46	明台寺	安置式	15.6	19.3	—	四面	1478	月江宗明童子/(梵字)/文明十年戊戌十二月十九日
47	明台寺	柄式	17.4	13.8	53.5	四面	1505	中明宗玉居士/(梵字)/永正二年乙丑四月十七日

※ 大きさa:一石五輪塔の地輪幅、台座の最大幅
 大きさb:一石五輪塔の地輪高(地表面上に見えている高さ)、台座上面の方形座幅
 大きさc:一石五輪塔高(地表面上に見えている高さ)、台座高

3 属性分類と消長

次に、図示した砂岩製一石五輪塔の各部位を形や大きさなどの観点から分類し（図 16～20、表 2）、その消長について検討する（表 3）。

(1) 地輪

地表面上にみえる縦横比について、以下のように分類した。

A類 横長（幅が広い）。

B類 縦長（縦／横が 1.25 未満）。

C類 縦長（縦／横が 1.25 以上）。

埋込式と柄式はA類とB類、安置式はB類とC類があり、埋込式は16世紀中葉までA類が多く、16世紀後葉にはB類が主体となる。柄式は確認できた数が少ないものの、16世紀前葉には出現しており、同後葉にはB類が主体となっている。安置式は15世紀後葉にB類が確認できるものの、その数は少なく、17世紀になると中世段階よりもさらに高い縦長のC類が多くなる。

(2) 水輪

正面観、横断面形、火輪との高さの比率について、以下のように分類した。

①正面観

A類 球形。最大径は中央付近、若しくは中央よりやや上に位置する。

B類 壺形。最大径は中央より上に位置し、肩が張る。

C類 算盤玉形。最大径が中央付近にあり、突出する。

D類 樽形。上下のくびれが少ない。

E類 その他。側辺が直線的となる。

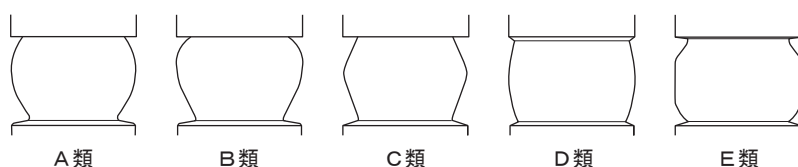


図 16 水輪正面観の属性

②横断面形

a類 円形。

b類 隅丸方形（直線部分がおよそ半分以下）。

c類 隅丸方形（直線部分がおよそ半分以上）。

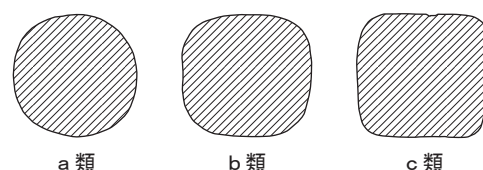


図 17 水輪横断面形の属性

③水輪高と火輪高の比

1類 水輪高／火輪高が 1.0 以上（水輪が火輪よりも高い）。

2類 水輪高／火輪高が 1.0 未満（水輪が火輪よりも低い）。

正面観は、主にA類（球形）→B類（壺形）→C類（算盤玉形）→D類（樽形）と変化し、16世紀前葉から中葉にはA類とB類の両者が混在し、17世紀前半にはE類が認められる。横断面形は16世紀末まではa類（円形）→b類（隅丸方形）→c類（隅丸方形）と変化し、a類は初期の一石五輪塔のみに認められ、17世紀にはb類とc類が混在している。水輪高と火輪高の比では16世紀中葉までは1類が多いのに対し、16世紀後葉には2類が多くなり、この頃に水輪が扁平化したことがわかる。

しかし、17 世紀になると再び 1 類が多くなる。

(3) 火輪

軒、屋弛み、隅棟について、以下のように分類した。

①軒

- A 類 軒下辺は軒端が反り上がる。軒上辺中央は直線的で、軒端に向かって緩やかに反り上がる。
 B 類 軒下辺は軒端まで直線的である。軒上辺中央は直線的で、軒端に向かって緩やかに反り上がる。
 C 類 軒下辺は軒端まで直線的である。軒上辺中央は直線的で、軒端は三角形に反り上がる。
 D 類 軒下辺は軒端まで直線的である。軒上辺中央は直線的で、軒端は三角形（若しくは直立気味）に高く（若しくは細く）反り上がる。
 E 類 軒下辺は軒端まで直線的である。軒上辺中央から軒端に向かって緩やかに反り上がる。



図 18 火輪軒の属性

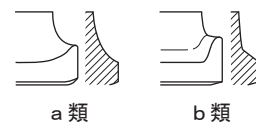


図 19 火輪屋弛みの属性

②屋弛み

- a 類 滑らかに湾曲する。
 b 類 屈曲（若しくは屈折）し、平面的に稜が生じる。

③隅棟

- 1 類 火輪上辺まで延びる（火輪上面が方形）。
 2 類 風輪下方まで延びる。
 3 類 火輪上辺まで延びない（火輪上面が隅丸方形）。

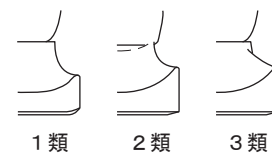


図 20 火輪隅棟の属性

軒は、15 世紀中葉～後葉のみ下辺端が反り上がり（A 類）、それ以降は下辺端まで直線的となる（B～E 類）。また、B～E 類の軒上辺は、中央の直線具合と軒端の形状から、主に C 類→D 類→E 類へと変化し、B 類は数が少ない。屋弛みは 16 世紀前葉までは a 類が多いのに対し、16 世紀中葉～後葉には b 類が多くなり、17 世紀になると再び a 類が多くなる。隅棟は中世段階において 1 類のみであり、17 世紀前葉には 2 類が目立ち、17 世紀中葉以降は 1 類と 3 類が混在する。

(4) 空風輪

空輪と風輪の高さと幅の比について、以下のように分類した。

①幅

- A 類 空輪幅が風輪幅よりも狭い。
 B 類 空輪幅が風輪幅よりも広い。

②高さ

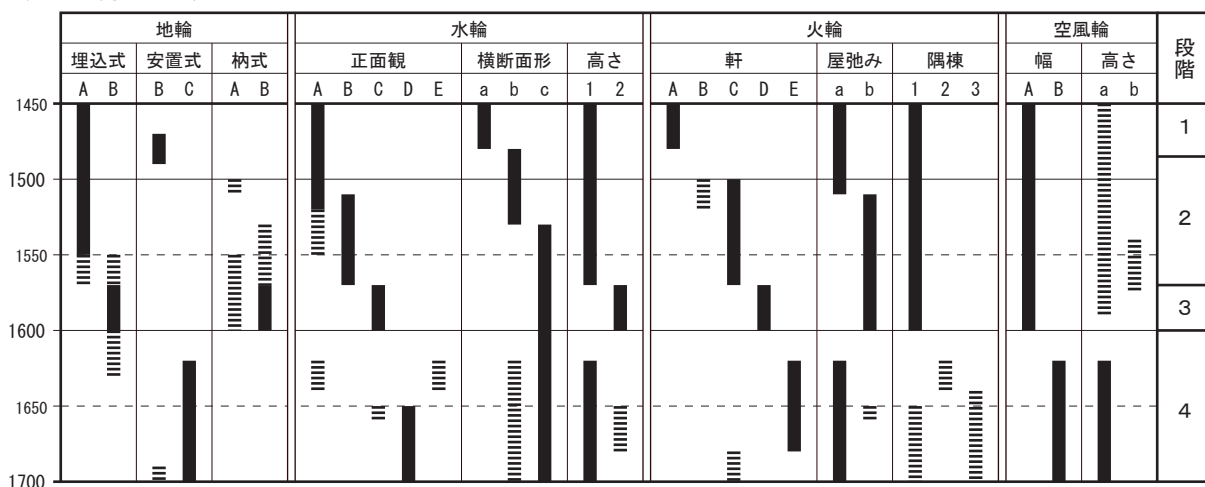
- a 類 空風輪高／風輪幅が 1.2 以上。
 b 類 空風輪高／風輪幅が 1.2 未満。

空風輪の幅は 16 世紀までは A 類のみであるが、17 世紀以降は空輪幅が肥大化し、B 類が多くなる。一方、高さは空風輪が扁平化する 16 世紀中葉から後葉にかけて b 類が存在し、それ以外の時期は a 類が主体である。

表2 一石五輪塔の属性分類

No.	所在地	分類	銘文 西暦	地輪	水輪			火輪			空風輪	
					正面観	横断面形	高さ比	軒	屋弛み	隅棟	幅	高さ
8	宝聚院	埋込式	1448	A類	A類	a類	1類	A類	a類	1類	A類	a類
22	天喜寺跡	埋込式	1471	A類	A類	a類	1類	A類	a類	1類	-	-
45	明台寺	安置式	1474	B類	A類	a類	1類	A類	a類	1類	-	-
46	明台寺	安置式	1478	B類	A類	b類	1類	A類	a類	1類	-	-
28	浄誓寺	埋込式	1497	A類	A類	c類	1類	-	a類	1類	-	-
29	浄誓寺	埋込式	1505	A類	A類	b類	1類	C類	a類	1類	-	-
47	明台寺	枅式	1505	A類	C類	b類	1類	B類	a類	1類	A類	a類
9	宝聚院	埋込式	1505	A類	A類	b類	1類	C類	a類	1類	A類	a類
10	宝聚院	埋込式	1507	A類	A類	b類	1類	D類	a類	1類	A類	b類
30	浄誓寺	埋込式	1511	B類	A類	b類	-	C類	-	-	-	-
31	浄誓寺	埋込式	1511	A類	A類	b類	1類	C類	a類	1類	-	-
23	大通寺	埋込式	1515	A類	A類	b類	1類	C類	b類	1類	-	-
24	大通寺	不明	1516	A類	B類	b類	1類	B類	b類	1類	A類	a類
11	宝聚院	埋込式	1525	A類	B類	b類	1類	C類	b類	1類	-	-
12	宝聚院	埋込式	1531	A類	B類	b類	1類	C類	b類	1類	-	-
32	浄誓寺	枅式	1533	B類	A類	c類	1類	-	b類	1類	-	-
33	浄誓寺	埋込式	1543	A類	B類	c類	1類	C類	b類	1類	A類	b類
34	浄誓寺	枅式	1548	B類	A類	c類	1類	C類	b類	1類	-	-
13	宝聚院	枅式	1564	A類	B類	c類	1類	C類	b類	1類	A類	a類
26	西光寺跡	枅式	1571	A類	B類	b類	2類	D類	a類	1類	A類	b類
35	浄誓寺	枅式	1574	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	b類
14	宝聚院	埋込式	1575	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	a類
6	松尾山麓廃寺	枅式	1578	B類	C類	c類	-	-	-	-	-	-
15	宝聚院	埋込式	1578	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	b類
36	浄誓寺	枅式	1579	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	-	-
16	宝聚院	埋込式	1580	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	b類
18	宝聚院	埋込式	1586	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	-	-
17	宝聚院	埋込式	1586	B類	C類	c類	2類	C類	b類	1類	A類	-
37	浄誓寺	枅式	1589	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	-	-
19	宝聚院	枅式	1589	A類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	a類
20	宝聚院	枅式	1591	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	-	-
27	西光寺跡	安置式	1627	C類	A類	b類	1類	E類	a類	2類	B類	a類
1	祖宝寺跡	安置式	1630	C類	E類	c類	1類	E類	a類	2類	B類	a類
21	宝聚院	安置式	1656	C類	D類	c類	1類	E類	b類	1類	B類	a類
2	祖宝寺跡	安置式	1656	C類	C類	c類	2類	E類	a類	3類	B類	a類
3	祖宝寺跡	安置式	1672	C類	D類	b類	2類	E類	a類	3類	B類	a類
4	祖宝寺跡	安置式	1693	B類	D類	b類	1類	C類	a類	1類	A類	a類
5	祖宝寺跡	安置式	1699	C類	D類	c類	1類	C類	a類	3類	B類	a類

表3 属性の省長



※表3では、その属性が主として使用されている時期を実線で示した。また、数が少ない場合や前後の時期状況から属性の消長が推定できる場合は破線で示した。

4 編年

前節で分析した各部位の属性の組合せと消長から、美濃における一石五輪塔の形態変化の推移を、以下のように4段階に設定した（表3、図21）⁵⁾。

1段階 15世紀中葉～後葉

2段階 15世紀後葉～16世紀中葉

3段階 16世紀後葉

4段階 17世紀前葉～後葉

以下、各段階の一石五輪塔について説明する。

(1) 1段階（15世紀中葉～後葉）

美濃において、一石五輪塔が出現する時期である。埋込式と安置式があり、埋込式は地中に浅く埋めるタイプと深く埋めるタイプの2者があり、地輪幅も一定ではない。また、安置式は縦長であり、一石五輪塔の機能時の正面観は横長である埋込式と異なる。このように、初期段階の地輪は複数の形式や属性が認められる。しかし、水輪の正面観は球形（A類）、その横断面形は円形（a類）、火輪の軒下辺端は反り上がる（A類）など、水輪より上方の形態は類似している。一方、15世紀後葉には水輪の横断面形が隅丸方形（b類）となり、その正面観も最大径が中央よりやや上に位置する球形のものが認められ、水輪の形態は他の部位よりも早く変化している。なお、空風輪まで遺存している資料は少ないものの、文安5（1448）年銘を有する石塔（図21-8）は、風輪の側辺が緩やかに湾曲し、空輪は最大径が中央よりやや上に位置する宝珠形を呈している。

(2) 2段階（15世紀後葉～16世紀中葉）

美濃において、一石五輪塔が拡散する時期である。埋込式が主体であり、柄式は16世紀中葉以降に多くなる。地輪は横長（A類）が多いものの、方形に近い形状となる。水輪は正面観が壺形（B類）のものが出現し、その横断面形は隅丸方形のb類からc類へと変化する。火輪は軒上辺端が三角形に反り上がり（C類）、屋弛みの属性もa類からb類と変化する。しかし、各属性が変化する時期は一樣ではなく、変化の過程も水輪の正面観のようにA類とB類が混在する時期もある。なお、空風輪は側辺に稜が生じ、空輪は最大径が中央付近にあって下方のくびれが少ない饅頭形のものが出現する（図21-13・33）。

(3) 3段階（16世紀後葉）

美濃において、一石五輪塔の造立数が最も多い時期である。2段階までは高さ約40～60cmの一石五輪塔が大半を占めているが、少なくとも3段階にはそれ以外に高さ30cm前後の小型品が出現している。埋込式が主体であるが、柄式の数が増えており、地輪は縦長（B類）が主体となる。水輪は正面観が算盤玉型（C類）、その横断面形は隅丸方形のc類、水輪高と火輪高の比は2類となり、2段階までの様相と大きく変化している。また、火輪も軒上辺端の反り上がりが高くなり（D類）、屋弛みは大半が屈折するb類である。空風輪は扁平化（b類）が進行し、空輪幅が風輪幅よりも明らかに狭いタイプが多くなる。

(4) 4段階（17世紀前葉～後葉）

美濃において、一石五輪塔の造立数が激減する時期である。確認できた数は少ないが、安置式が主体であったと考えられ、17世紀前葉には埋込式がわずかに残る。この段階には、地輪のC類や水輪

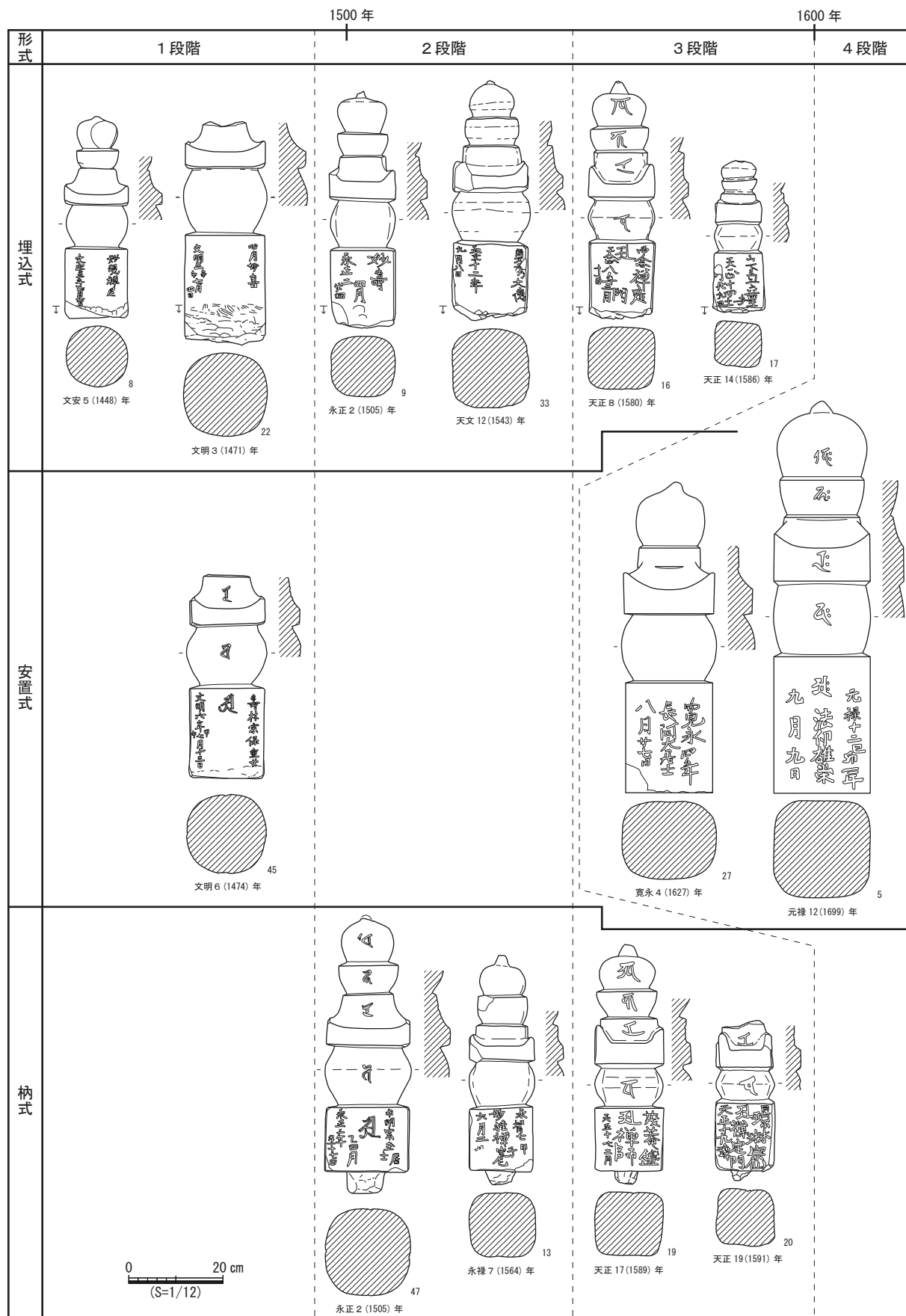


图 21 一石五輪塔編年図

の正面観のD・E類、火輪の軒形態のE類、空風輪のB類など、3段階までに認められない属性が多く出現している。また、3段階において主体的であった水輪の2類や火輪のb類などの属性も、4段階になるとそれぞれ1類やa類へと変化する傾向がある。一石五輪塔全体の大きさをみても、この段階には高さ60 cmを超える大型品が出現している。さらに、小稿では属性分類に含めなかったが、地輪の銘文の表記法も3段階までは向かって右側に名前、左側に年月日を刻むものが多い（小野木他2017）が、今回資料を追加して実見した限りでは、4段階の資料には中央に名前、向かって右側に年号、左側に月日を刻むものが多いようである。このように、4段階の一石五輪塔は3段階以前の属性と比較して大きく変化しており、編年上の画期といえる。

5 まとめ

一石五輪塔は、「15世紀に入ること、おそらく大阪府南部付近をその発生地として、全国に広がっていく」と考えられている（狭川2018）。一方、美濃では少なくとも15世紀後葉頃には一石五輪塔が出現しており、伊勢や三河、遠江、駿河では16世紀に入ってから出現する（竹田2017、松井2017、溝口2017）ことと比較すれば、東海地方においていち早く一石五輪塔が導入された地域といえる。

美濃における15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔は、これまで22地点29基⁶⁾が知られている。市町村別の基数では養老町4、垂井町2、大垣市14（このうち大垣市上石津町2、大垣市墨俣町12）、輪之内町1、瑞穂市2、岐阜市6であり、これらの分布は、およそ垂井町・養老町などの西部域と大垣市墨俣町・岐阜市などの東部域に分かれる（図22）。

このうち、西部域の寺院には、開山・開基に近江の僧侶が関係している宝聚院と天喜寺が含まれている。宝聚院は近江国に所在した永源寺の僧悦岩が文安元（1444）年に開基し、その4年後にあたる文安5（1448）年の年号を有する一石五輪塔が造立されており、これが美濃の一石五輪塔では最古の年号を有するものである点は注目できよう。宝聚院の一石五輪塔は文安5年以降、永正2（1505）年まで年号の刻まれたものが確認できないが、宝聚院から南東へ約3 km離れた天喜寺には文明3（1471）年銘の一石五輪塔が存在している。また、同じく西部域の浄誓寺も明應4（1495）年に改宗し、その2年後にあたる明應丁巳（1497年）の銘を有する一石五輪塔が造立されており、宝聚院と同様に寺院の開基や改宗の数年後の年号が刻まれた一石五輪塔が造立されている。また、浄誓寺には、一石で造られた大型の五輪塔がある（図13-40）。これは、地輪下方を深く埋め込むもので、形態的に一石五輪塔が美濃に伝えられた頃の造立と考えられ、近江でも散見できる。このように、美濃の一石五輪塔の導入の経緯は、寺院の開基や改宗を契機に、石塔に関する新しい情報が近江を含む他地域から波及したことが一因としてあったと考えられる。

一方、東部域の一石五輪塔は大垣市墨俣町、輪之内町、瑞穂市などの長良川流域に集中しており、特に大垣市墨俣町所在の明台寺には、15世紀代の

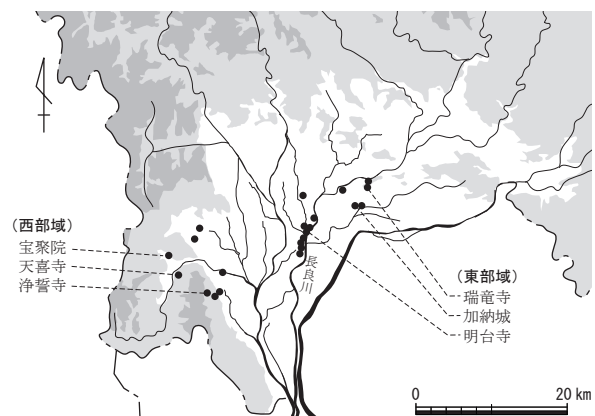


図22 15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔の分布

年号が刻まれた一石五輪塔が6基もある。そのうち3基は美濃守護代斎藤利藤との関連が指摘され(横山 1996)、1基は斎藤利為の法名が刻まれている(図 15-47)。また、大垣市墨俣町は室町時代以前の主要街道である鎌倉街道の宿場町があったとされ、当地は長良川の渡河地点でもあり、交通の要衝であった。さらに、その上流の岐阜市域でも加納城跡や瑞龍寺などで15世紀代の一石五輪塔が確認でき、いずれも15世紀中葉から末葉にかけて成立したとされている(内堀・三宅 2004)。このように、当時の長良川流域は政治・経済・文化の中心的な場であり、多くの人々が往来し、様々な情報が行き交っていたと考えられ、その拠点施設や関連施設において、いち早く一石五輪塔の情報がもたらされたと考えられる。

また、美濃における1段階の一石五輪塔は埋込式と安置式があり、前者は西部域の垂井町・養老町などに多く、後者は東部域の大垣市墨俣町・岐阜市などで確認できる。小稿では、東部域の一石五輪塔を十分に図示できなかったが、岐阜市における1段階の一石五輪塔のうち、瑞竜寺天澤院・臥雲院や法円寺のものは安置式で、地輪が縦長である。また、瑞竜寺天澤院のものは四方梵字が刻まれ(写真4)、大垣市墨俣町の明台寺一石五輪塔(図 15-45・46)と類似している。このように、1段階には2つの地域で異なる形式の一石五輪塔がほぼ同時期に伝えられ、限られた階層の人々に受け入れられた可能性が指摘でき、2段階には埋込式が普及し、安置式は淘汰されていったと考えられる。

次に東海地方に目を向けてみると、初期の一石五輪塔は、美濃、伊勢、三河の各地域において、いずれも水輪の横断面形が円形を呈している点が共通している。これは、すでに多くの研究者が指摘するように、一石五輪塔が各地の組合せ式五輪塔を模倣して成立したことに起因すると考えられ、成立時期が異なっても、同じ属性を有している点が特徴といえる。しかし、美濃における3段階の水輪の算盤玉形を呈する正面観やその扁平化、火輪の軒上辺端の反り上がりの高さなどの属性は、伊勢や三河の一石五輪塔では少なく、東海地方においては特徴的な形態といえる。さらに、この段階は一石五輪塔の造立数が増え、小型品も造られ、幅に対して奥行が短い扁平な一石五輪塔も散見できる。このように一石五輪塔の製作数の増加とともに、その造立階層が下層へと広がり、それとともに形態の在地化が進行していったと理解したい。

ところが4段階になると、一石五輪塔の造立数が激減し、美濃ではそれまでとは大きく異なる形態の一石五輪塔が出現する。さらに、美濃、伊勢、三河、遠江、駿河などの各地域で、地輪の長足化や風輪の扁平化、空輪の肥大化などの属性が確認でき、旧国を超えた石塔の斉一化を垣間見ることができる。しかし、写真5のように小型品も少なからず継続して造立されており、水輪の正面観が算盤玉形を呈するものも確認できる(図



写真4 瑞竜寺天澤院石塔



写真5 妙応寺石塔群

4-2) ことから、4段階の一石五輪塔は3段階の中世的な要素を部分的に残しつつ、他地域の影響を受けた石塔へと変化していったと考える。

おわりに

小稿では、美濃における一石五輪塔の分布と編年について検討した。今回は一石五輪塔の観察に基づく考古学的な研究方法に終始したが、一石五輪塔に限らず、石塔の分布や形態変化の要因については、宗教的・社会的・政治的な時代背景を考慮し、様々な研究分野からの検証を経た慎重な議論が不可欠であり、そのためには今後も継続した基礎的なデータの作成と蓄積が必要であると考えます。

なお、小稿の執筆に際し、下記の方々からご教示をいただきました。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

狭川真一、佐藤亜聖、鈴木元、高田康成、竹田憲治、富田真一郎、中島和哉、廣瀬正嗣、松井一明、溝口彰啓、山路裕樹、瑞龍寺天澤院、浄誓寺、大通寺、天喜寺、宝聚院、明台寺

注

- 1) 図1のドット数は、平成30年10月までに筆者が一石五輪塔を確認した228箇所の所在地を示す。しかし、美濃のすべてを調査した訳ではなく、調査を進めればその数はさらに増える。
- 2) 石材が特定できないものは、一石五輪塔を実見しても判断できなかったものと、文献等に掲載された写真から石材を推定できなかったものがある。前者は関ヶ原町妙応寺の石塔、後者は揖斐郡揖斐川町の揖斐川上流域(旧徳山村)の石塔群である(岐阜県教育委員会1985)。
- 3) 銘文は、以下のとおり記載した。
 〳〵〵〵改行、〳〳〳〳欠損文字のうち字数が推定できるもの、〔 〕欠損文字のうち字数が推定できないもの。
- 4) 製作時の加工痕の呼称は、既存の分類(小野木2015)による。
- 5) ただし、17世紀第一四半期の年号を有する一石五輪塔は数が極めて少なく、3段階から4段階への移行期については、もう少し検討が必要である。
- 6) 15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔の基数は、既存の研究(横山1996)に筆者が実見したものを追加した数である。

引用・参考文献

- 内堀信雄・三宅唯美 2004「土岐氏と道三・信長の城下町—東海的首都“革手”から天下布武の本拠“岐阜”へ—」『守護所・戦国城下町を考える』守護所シンポジウム@岐阜研究会
- 小野木学 2012「東海<美濃>」『中世石塔の考古学—五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布—』高志書院
- 小野木学 2015「五輪塔（火輪）の製作工程の検討」『岐阜県文化財保護センター 研究紀要』第1号
- 小野木学・中谷正和・竹谷充生 2017「美濃の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉—一石五輪塔を中心として—』第9回 中世葬送墓制研究会資料
- 上石津町教育委員会 2004『新修上石津町史』
- (財)元興寺文化財研究所 1982『高野山発掘調査報告書 奥之院・宝性院跡・東塔跡・大門』
- 北野隆亮 2017「紀伊の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉—一石五輪塔を中心として—』第9回 中

世葬送墓制研究会資料

岐阜県企画部土地対策課 1986『岐阜県土地分類基本調査「彦根東部」、「津島」、「桑名」』

岐阜県企画部土地対策課 1995『岐阜県土地分類基本調査「横山」』

岐阜県教育委員会 1985『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区 埋蔵文化財分布調査報告書』

国土庁土地局 1975『土地分類図（岐阜県）』

狭川真一 2003「戦国時代における墓地の様相」『戦国時代の考古学』高志書院

狭川真一 2018「中世武士の墓と近世大名墓」『第10回大名墓研究会～近世大名墓研究の到達点～』大名墓研究会

墨俣町役場 1956『墨俣町史』

関ヶ原町 1992『関ヶ原町史 通史編別巻』

竹田憲治 2017「伊勢・志摩・伊賀の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』

中世葬送墓制研究会

中世葬送墓制研究会日本石造物辞典編集委員会 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館

日本石造物辞典編集委員会 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館

松井一明 2017「三河の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』中世葬送墓制研究会

松井一明・溝口彰啓 2010「第5章 石造物調査1 市域の中世石塔（1）」『岩村城跡基礎調査報告書』Ⅰ 恵那市教育委員会

松井一明・溝口彰啓 2019「第2章 石造物調査2・3 ——恵那市域の中世石塔（2）・（3）——」『恵那市遺跡詳細分布調査報告書』 恵那市教育委員会

溝口彰啓 2017「遠江・駿河の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』中世葬送墓制研究会

横山住雄 1996『岐阜県の石仏石塔』濃尾歴史研究所

養老町 1978『養老町史 通史編下巻』